

---

# 古典の恋

橙

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古典の恋

### 【Nコード】

N3468M

### 【作者名】

橙

### 【あらすじ】

古典の苦手な朝子は、古典の得意な小野君に、勉強を教わることになりました。

古典作品にはあまり関係ありません。

勉強と妄想による、恋のお話。

古典作品に対して理解を深め、味わい、それを通していにしえの人々に思いを馳せること。それが、あたしにはどうやら難しいらしい。

あたしはもともと、国語や歴史系科目より、数学とか、化学とかの方が好きだ。文系教科は答えが曖昧で、あまりにも暗記に頼るところが多い気がする。それに比べて数学は筋道も答えもしつかりしているし、解いていて気持ちがいい。化学も、整然としているから好き。

自分は本当に、根っからの理系人間だと思う。

苦手な文系科目の中でも、特に古典だけはもう、どうしようもない。

助動詞が、何だって？うんたら活用とかどうたら活用形って、全部覚えなきゃいけないの？「オモムキブカイ」って結局どういうこと？「さうざうし」って、「騒々しい」ということじゃないの？

理解できないことばかりで、あたしは白旗を掲げるしかない。仮にも日本語なのに、どうして英語よりもできないんだ。古文法のテキストはそっけなくて、何にも励ましてくれない。まずはあんたが覚えるしかないって、冷たく突き放すばかりだ。

どうしろって言うんだよー。あたしは高校に入って早々途方にくれて、古典の授業についていくことを放棄した。授業中は、いそいそと内職に励むか、睡眠時間にあてている。結果は、素直に定期テストに跳ね返る。

でも、どうせ理系に進むつもりなんだし、それでいいと思っていた。

そもその始まりは、職員室でともえ先生に呼び止められたことだった。

「藤原さん、あなた古文の成績、ちょっとまずいわねえ。」

にここに、ちっともまずいとは思っていないさそうな顔で、ともえ先生は言った。

ともえ先生は、あたしのクラスの古文を担当している先生だ。おっとりとして、やさしい雰囲気をもつともえ先生は、割と人気がある。ただし、授業が眠いことでも有名だった。

「1年の時もギリギリだったそうね。中間も赤点だったし……次の期末、期待できる？」

笑みを含んだやさしい声に、あたしはいたたまれなくなって、首を縮めた。逃げ出したい気持ちでいっぱいになる。

職員室には日誌を届けに來ただけだった。けれど用事が済んだ後に、うっかり生徒会顧問の先生につかまって、だらだら雑談していたのだ。やっと終わったと思ったら、今度はこれ。早く退散していればよかった、と後悔した。こわごわ先生の顔を見つめる。

「はあ、あの、……たぶん期待できないと思います。」

すみません、と小声で謝ると、先生はうーんとうなって首を傾けた。

「藤原さんは理系みたいだけれどもね。……進級できないと、それも関係なくなってしまうものねえ。」

ぎよっとした。

「あの、あたし、そんなにひどいんですか？」

「このまま行けば、かなり危ないわね。」

にここに。先生は微笑んでさりと云った。

さあつと、血の気の引く思いだった。進級に関わってしまうほど、あたしの古典の成績はやばいのか。今までさばりにさばったあたしの自業自得だけれど、留年は嫌だ。

「そんなに暗い顔しなくても、まだ一学期だし、がんばれば挽回できるわ。」

「ということで、」

「ともえ先生はそこで言葉を切って、はいこれ、とあたしに大量のプリントの束を差し出した。」

「何ですか、これ……？」

「決まっているじゃない。課題よお。」

先生は口元に手をあてて、本当に嬉しそうにこころ笑った。

あたしは全然、笑えない。手の中の紙束が、やけにずっしりと重かった。

「それだけやれば、期末テストも大丈夫でしょう？1年の時の範囲からカバーしてあるから、この機会に一気に総復習しちやいなさい。大変だったんだからね、それ作るの。」

まあ単に、1・2年のテキストをプリントアウトしただけだけど。頼に手を当てて、ともえ先生はそう言った。そのやわらかな笑顔をまじまじと見つめて、あたしは呆然とするしかなかった。

「こんなに？」

持つ、というよりも抱えるしかないくらい多い藁半紙の束。これを全てやれ、というのだろうか。テスト教科は古典だけではないというのに？生徒会だって忙しいのに？夏からそろそろ塾に通おうかなあ、なんて考えているのに？

無理です。そう勢い込んで言おうとしたあたしに、先生が先手を打った。

「提出は絶対の義務ね。まあ、当たり前よねえ。進級がかかっているんだもの。」

のんびりと牽制されて、あたしはぐつと詰まった。

そうです、進級。進級がここでは最重要問題だ。

ぐうの音も出ないあたしに、先生がやさしく言った。

「さすがに一人でそれ全部、っていうのはあなたには厳しいだろうから、誰かに教えてもらいなさい。ホラ、あなたのクラスにはちょ

うどいい子がいるじゃない。小野くんが。」

へ、とあたしは目を丸くした。意外な名前が出たからだ。

「小野くん、って、うちのクラスの小野くんですか？」

「そおよお。彼、たぶん藤原さんのクラスで一番古文が得意なんじゃないかしら。居眠りも内職もしないのって、あなたのとこじゃ小野くんだけだしねえ。」

笑顔でちくりと刺されてしまい、あたしはひええと肩を縮めて小さくなった。どうやら、ともえ先生ってただおっとりしているわけではないみたいだ。この課題といい、結構容赦ない。

「彼、いいコだし、たぶん快く教えてくれるだろうから、頼んでみなさいな。一応、こちらからも言ってみるから。」

「あの、先生は教えてくれないんですか……？」

おそろおそろ、訊いてみた。先生はいい笑顔で明るく言った。

「そんな暇ないわ。」

小野孝志くん。残念だけど、顔と名前を覚えているだけで、あたしはまだまともに話したことがない。

小野くんは穏やかで優しくそんな雰囲気をもった人だ。幸い、話し掛けづらい感じではない。けれど彼はどちらかといえば、賑やかな集まりには入らず、それを周りで見ているのが好きなタイプのようなだった。だから、お祭りごとが大好きでその真ん中に行きたがるあたしとは、今まであまり接点がなかったのだ。

意外と鬼なともえ先生は、頼んでみろって気軽に言っていたけれど。

正直すごく頼みづらい。今まであまり関わったことのないクラスメートから、突然「進級がかかっているから勉強教えて」とか言われて、面倒がらずにいいよって言うてくれるものかな？あたしなら断るかも。

それに、ファーストコンタクトがこれって、すごく情けない。

けれど他にどうしようもないので、あたしは授業後に思い切って頼んでみることにした。

こっちはお願いする身、嫌だとか言っただけ駄目だ。

あたしは一応、生徒会執行部の役員をやっている。しがたないヒラ執行委員だけれど。今日は、特に仕事がないから放課後は丸ごと空いていて、教えてもらうには都合が良かった。

もちろん、小野くんの方の都合は、どうなのかわからない。彼は部活とか塾とか、やっているのだろうか。

ともかく、まずはきちんとお願いしてみよう。あたしは気合を入れる意味で、前髪をとめているコンコルド・クリップをぱちんとめ直した。くちばしみたいな形のこのアクセサリーが、あたしは

好きなのだ。今日は、蝶と唐草模様のようなものをあしらったデザイン。グリーンの濃淡がきれいでお気に入り。

あたしは廊下側にある彼の席に、そつと近づいた。小野くんは文庫本を読んでいる。カバーがかけられているので、本の題名はわからなかった。

「小野くん、ちょっといいかな？」

驚かさないようにしたつもりだったけれど、小野くんは突然声をかけられて、びっくりしたようだった。顔を上げた拍子に、ぱたと本が閉じられる。

「藤原さん？どうかした？」

あたしは少しほつとした。名前は、覚えてくれているみたいだ。「あのさ、ともえ先生から何か聞いてる？」

先生の話が通つていれば話は早い。そう期待したのだけれど、小野くんはえ、と眉根を寄せた。困惑しているように首を傾げる。

「大江先生？古文の？ いや、特にないけど。」

ちよつと、ともえ先生！

あたしは叫びだしたい気分だった。こつちも声をかけておくから、とか言っていたのに、全然あてにならないじゃないか。

仕方なく、あたしは自ら恥をさらして、ことの次第を小野くんに説明した。ああ、情けない。自分の古文の成績がいかに壊滅的かを話しながら、あたしはどうしても気分が沈んでいくのを止められなかった。胸がずんと重くなっていく。

今まであまり関わりのなかった人に、ピンチだからって声をかけて、泣きついて。なんて格好悪いんだろう、あたしは。

「……それでね、小野くんが良ければ、暇な時だけでいいから勉強をみて欲しいんだ……。」

軽く自己嫌悪しつつ全部言い終わると、小野くんは拍子抜けするくらいあっさり了承してくれた。



「藤原さんが俺でいいなら、俺は全然構わないよ。」

あまりにもすんなり聞き入れてくれたので、あたしはかえって驚いてしまった。

「えっ、本当に？でも、小野くんの予定とかは、大丈夫？」

小野くんは苦笑した。

「帰宅部で塾も行っていないし、暇な人間だから。別に今日からでもOK。」

いい人だ。あたしはほれぼれと感心した。ありがたいよ、後光がさしているよ！今なら崇めることだってできそうだ。

「本当にありがとう。じゃあ、早速お願いします。先生。」

ちよつと親しみを込めてそう言つと、小野くんも微笑みを返してくれた。

図書室じゃ声は出せないし、ということで、あたしと小野くんはそのまま教室に残つて勉強を始めることにした。小野くんはまず、課題の中から何枚かピックアップしてあたしの前に出した。とりあえず、あたしの力がどのくらいなのかを知りたいらしい。

彼が選んだのは、助動詞の意味用法や、用言の活用の種類や活用形、それに単語の意味をきいてくるものと、あとは現代語訳の問題だった。

たぶん基本的なものを選んでくれたんだろうけれど、あたしには十分難しかった。頭を抱えて四苦八苦しながら問題を解いていくと、信じられないことに1時間をゆうに超えてしまった。考え込むわりに何も思いつかず、ほとんど無意味にシャープペンシルをくるくる弄っていただけだったけれど。小野くんはあたしが変な汗をかきつつプリントとにらめっこしている間、じつと辛抱強く待つてくれた。

採点してみると、やっぱりひどいものだった。意味も活用も、あたしの頭の中には全く入っていないらしい。だから文章も読めな

い。何を言っているのかわからない。ねえ、古典ってやっぱり外国語だよな？

あまりにもひどい結果に、あたしは机にがつくりと突っ伏した。小野くんは正解の少ない（もしくはない）プリントを見て、ちよつと困ったような顔をしていた。厄介なものを引き受けたこと、後悔しているのかもしれない。

「……まあ、これから頑張ろうか。」

小野くんが、あたしと彼自身の双方を励ますように言った。あたしはいたたまれずに、みじめに背を丸めた。

「なんか本当に……こんなでごめん。」

あれだけ時間をかけておいてこれかよ、と自分でも言いたくなるくらいだ。長いこと小野くんを待たせたのに。へこむあたしに、小野くんはちよつと笑いかけた。

「これから覚えていけばいいよ。」

あたしは、お腹の底からため息をついてしまった。

「その、覚えるっていうのがさ……。古典って、やっぱり暗記科目だよな。」

ひたすら暗記するのって、すごく苦手だ。地歴公民もそうだけれど。でも、まだ社会科目の方がある程度役立つ知識だと思う。古文単語はなぜ覚えなければいけないのか、あたしの中でまだ納得できる答えがないのだ。

小野くんは頷いた。

「そうだね。結構、覚えないと始まらないところがあるし。」

藤原さんは、そういうの苦手？

あたしは力なく、こくりと頷いた。小野くんは少し考えるようにあごに手をあてて、凄惨な結果となったあたしのプリントを一枚、ぴらりと手に取った。

「確かに、暗記はある程度必要だと思うけど。でも、古文はそれだけじゃないから。」

小野くんの手にあるのは、現代語訳のプリントだった。例えばこ

れだけど、と言って、ごそごそと自分のシャープペンシルを取り出す。

「古文って、今の言葉だけで考えてたら全然わからないだろ。昔の言葉の知識がないと読めない。だから暗記するんだ。暗記する知識はただの手段。一番大事なのは、その文章が何を言っているのかを読み取ることだよ。」

「どうして、昔の文章の意味をわからなくちゃいけないの？」  
こんな大変な思いをして。どうせ、今は使えない言葉なのに。  
ずっと考えてきたことだからか、ぼろつと小野くんをさらに困らせる質問をしてしまった。そんなことを小野くんに聞いたって、意味がないのに。すぐに、そのことに思い当たって、内心で慌てた。  
だって、今のあたしでは、どんな答えにも納得できないのは明らかだ。あたしは古典が嫌いなのだから。

小野くんは困ったように頬をかいいた。

「それは俺も答えられないけど。でも、今は使わないけど、古典も言葉だから。言葉って、誰にも意味がわからずに伝わらなかつたら、死ぬものだから。」

だから俺らが学んでいるんじゃないかって、思ってる。そう言つて、小野くんは少し照れくさそうに笑って、がりがり頭をかいいた。

「なんか、すごく恥ずかしいな。変なこと言った。」

「全然、変じゃないよ。」

ふるふる首を振って否定した。あたしは感動したのだ。小野くんは古典が好きなんだな。ちゃんと考えて、理由を持って勉強している。それって、本当に「学んでいる」って感じがする。

「まあ、それは置いておいて。古典の文の言っていることがわかるって、結構、できると快感だよ。」

小野くんはそう言つて、プリントのあたしが書いた答案の横に、さらさら書き始めた。あたしはその手元を覗き込む。

それは、魔法みたいだった。

「うわ。」

思わず感嘆の声を上げる。

『出家して悟りを開こうとする人は、捨てきれない気がかりなことを途中で止めて、そのまま捨てるべきである』（徒然草 第五十九段）

『あの白く咲いている花を、夕顔と申します。花の名前は人のように、このような粗末な垣根に咲くのでございます』（源氏物語 夕顔）

うる覚えの単語を、そのまま不細工につきはぎしただけのあたしの現代語訳の横に、小野くんは流れるように自然な訳を書いていった。不自然なあたしの解答とは比べるべくもない。ちゃんと、意味のわかる言葉。小野くんはこの文の言いたいことがわかっていて、そしてあたしのような他の誰かにもわかる形に、さらりと変えることができる。あたしには思いもつかなかった語彙を使って。

わかりやすく自然なその口語訳に、あたしはほれぼれとした。

「すごい、小野くん。上達部みたい。」

かんだちめ  
上達部というのは、貴族の中でも最も偉い人たちのことだ。さっきやったプリントに出てきた、重要単語の一つ。つまり、小野くんはすごく古典ができるんだね、ってことが言いたいのだ。

小野くんは一瞬きよんとして、おかしそくに声を上げて笑った。

「何、上達部って。藤原さんっておもしろいなあ。」

「いやー、だって小野くんの古文力って、平安の貴族並みだと思うよ。」

「そんなわけないだろ。」

小野くんはツボに入ったらしく、まだハハハと笑っていた。あたしは調子に乗って、にやにやしながら言った。

「よし、これからは『殿』とか呼ぼうかな。」

小野くんはふと笑うのをやめて、真面目な顔になった。

「それは、嫌だな。」  
もちろん、冗談です。

## 2 (後書き)

本文中の訳は、拙い自己流です。ご注意ください…

あたしと小野くんの古典特別授業は、その後も週に2回くらいのペースで行われた。すべて、小野くんの寛大な心のおかげだ。小野くんは日程をいつもあたしの都合に合わせてくれて、嫌そうなそぶり一つ見せずに、この出来の悪い生徒の面倒を見てくれる。本当、頭が下がる思いだ。

あたしはというと。小野くんの優しさに応えられずに、毎回落ちこぼれぶりをさらしていた。絶望的なほど、あたしの頭の中には古典の知識が入っていないらしいのだ。何度も何度も忘れて、同じ間違いを繰り返す。それが覚える近道だって、小野くんは言ってくれるけれど。

「……つまり、同じ推量の助動詞でも、『なり』は『音あり』で耳からの情報、『めり』は『見あり』で目からの情報で推量する、ってことで……」

「わー、ちよつと、ちよつと待って！」

あたしは頭を抱えた。頭の中がこんがらがって目が回りそうだった。助動詞がぐるぐると渦をまいている。

「『なり』って、この前は完了の助動詞ってやらなかった……？」

うん、と小野くんは頷いた。

「それとは別で、今度は推量。」

助動詞ってやつは！

あたしはがつくりと机に突っ伏した。前回のこの特別授業でも、やたらと意味の多い助動詞「む」に苦しめられたばかりだ。どうして昔の人は、こんなに面倒くさいものを使っていたのだろう。

「一度覚えちゃえば、楽だから。頑張れ。」

小野くんが励ましてくれるけれど、あたしはため息を抑えられな

い。

「あたし、理系なのにな……。」

どうしてこんなに、必死こいて古典なんかやっているんだろう。もちろん、今は進級がかかっているからですが。でもどうせ、あたしには必要なくなってしまう教科だ。

我が高校の文理選択はいつも、3年生に上がってから行われる。広い知識を身に付けるため、という学校の方針らしいけれど、これは他の高校に比べると遅いらしい。だからこうして、理系志望のあたしが古典に苦しめられ、また逆に文系の人が物理化学に苦しめられるという事態が起こる。

あたしの友達に日野頼子という子がいるが、こいつは文系志望でいつもすごく難しい応用にまで踏み込むこの学校の数学にキレている。文理は違えど、あたしと頼子に共通するのは、「必要ないのに！」という思いだ。

小野くんは少し口の端をゆるめ、苦笑した。

「確かに、文系の俺と理系の藤原さんじゃ、古文のモチベーションに差があるのは仕方ないことだけだ。」

古文ってさ、高校生が一番嫌いな教科らしいね。」

「そうなんだ。」

わかるな、それ。

心からの同意をこめてあたしが頷くと、小野くんは苦笑しつつ軽く息をついた。

「そんなに嫌わなくてもいいのに。……でも、文系にも理系にも、古文嫌いな人はたくさんいるよなあ。単語や問題パターンをひたすら覚えるだけで、しかも何の役に立つのかよくわからない教科だから。」

呟く小野くんの顔は、少し残念そうというか、寂しそうな表情だった。



嫌われ者の古典。

「……でも小野くんは、古典が好きなんだよね。」

あたしがそう聞くと、小野くんは意外そうにこちらを見つめて、それからふと笑った。

「うん。すげえ好き。」

いい顔だな、と思った。

小野くんは古典が好きだから、古典が嫌われ者で寂しいんだろうな。

皆から面倒くさい、意味ない、必要ない！と思われている古典。

あたしもそう思っている一人だ。古典なんて、今回みたいに進級がかかっていなかったら、わざわざやらないよ。

でも、小野くんは違う。必要だからってだけではなく、彼は古典が好きで、理由を持って勉強している。

小野くんは、古典のどんなところが好きなんだろう。彼をあんな笑顔にする、古典の魅力って何なんだろう。

あたしにはまだわからない。嫌々、勉強し始めたばかりだから。

小野くんの上達部には遠く及ばない。

たぶん、必要ないからって毛嫌いしていたら、近づくこともできないんだろう。

だとしたら、こうして強制的にでも古典の勉強をしている今は、もう二度と来ないかもしれないくらいなの、すごいチャンスなんじゃないかな？

「あたし、理系志望だけど。どうせいらない、とかもう言わずに、古典頑張るね。」

気づいたら小野くんに、そう宣言していた。

「うん。」

小野くんは唐突な発言を笑ったりせずに、ひとつ頷いた。

その顔を見つめていたら、何故か無性に恥ずかしくなって、あた

しはうつむいた。ごまかすように、前髪のコルド・クリップをとめなおす。頬が、なんでだろ、急に熱くなった気がする。

嫌いな古典だけれど、いつか少しはそれのおもしろさがわかるようになればいい。上達部までは無理にしても、頑張って出世して、下級役人くらいになればいいな。

そんなバカなことを考えて、ふと気づいた。あたしは一応、女だから、役人よりは姫なのだろうか。まさか。

やめやめ、あたしは姫なんて柄じゃない。しがない下級役人くらいがふさわしいんだ。あたしはぶんぶん頭を振って、変な空想を追い払った。ふうつと息をつくとき、こちらを不思議そうに見ている小野くんと、目が合った。

「 昼から降り続く雨がしとしと、小さな庭の灌木を濡らしている。しめった草と、木のおいが鼻をかすめていく。空気が底のほうだけ少し、ひんやりと冷たかった。

梅雨の長雨、ながめ、とぼんやりしていたら、かすかな砂を踏む音が聞こえてはつとした。

こんな刻限に、誰が。

御簾をすかしてじつと見ると、夕闇に、黒い人影が佇んでいた。顔は見えない。けれども香りで、かの貴人がいらっしやっただとわかった。

あんなところにいたら濡れてしまう。

そう思ったけれども、こちらから声をおかけしても良いのか、わかりかねた。ためらっていると、かのお方からそつとお声がかかった。

「 袖だけでなく、この身すべてが濡れてしまいました。」

この、穏やかなお声を聞くのも久しぶりだ。すうっと、香りが近くなった。

「 ……お会いしたくて。」

そう言ってくださったのが嬉しくて、こちらも何かお返ししたかった。けれど気のきいた歌の一つでも、すぐに詠めるはずもなく。教養のないこの身が口惜しい。ひどくつまらないことしか言えなかった。

「 お風邪でも召されたら大事。すぐに拭きませんと。

ええと、タオルか何か……。 」

貴人がきよんとした。

「 え、タオル？ 」

はつとした。

黒板の前ではともえ先生が、のんびりと古典の教科書を朗読している。

古典の授業中。教室内の3分の1は睡眠中、もう3分の1は内職中、残りは……何をしているんだろう？あたしの席からは、全部は見えない。

授業中暇で暇で、気づいたらぼーっとして変な空想をしていたらしい。古典の授業もむやみに寝なくなっただけど（たぶん小野くんのおかげだ）、全然集中していないなあ。あたしは一人で赤くなりつつ反省して、椅子に座りなおした。

窓の外はしとしと雨が降っていて薄暗い。明るい蛍光灯に照らされた教室が、くつきりと外の風景から浮かび上がっているようだ。いつもとは違う、まるで別空間のよう。

最近は頑張つて古典を勉強しているし、資料の便覧を眺めたりして、以前よりも知識が増えたのだろう。空想できるくらいに。けれど、昔はタオルなんてなかっただろうから、それで今ははつと現実引き戻されたのだ。あたしの知識も浅い。

古典の昔は、タオルの代わりに何を使っていたのかな。濡れたり何かこぼしたりしたときに、そういうものが必要だと思うけれど。小野くんに聞いてみようかな。困らせてしまうだろうか。

あたしの変な空想の中の、貴族はたぶん、小野くんの顔だったと思う。

姫の方は、あまり考えていないけれど、あたしではない。いくらあたしの空想でも、そこまでおこがましい、都合の良いこと考えたりしませんよ。しません、しません。

くるくるシャープペンシルを手でいじりながら、今度はきちんと先生の話に注意を向けた。それにしても、この教科書の語り手は性格が悪い。「かたはらいたし」だって。

（あとで小野くんに聞いたのだけれど、「かたはらいたし」はあたしが思っていたような、高笑いして人をバカにするような意味ではないらしい。「傍らにいるのが苦痛」ってことで、見苦しいとかきまりが悪いとか、気の毒という意味のようだ。）

雨はしぶとく降り続いている。結局、授業の内容はあまり頭に入ってこなかった。

「朝子。」

休み時間。呼ばれて振り向くと頼子だった。片手をあげて近寄ってくる。もう片方の手には、紙パックのジュースを持っていた。

「あんた近頃、古典の授業でも爆睡しなくなっただね。成長したじゃん。」

「まあ今の授業は全然、ちゃんと聞いていなかったけどね。」

苦笑で返すと、頼子もニヤリと笑みをよこした。皮肉っぽい顔になる。

「例の古典の特別授業、うまくいったんの？」

頼子はそう言って、教室内をぐるりと見回した。雨がふっているせいか、いつもより人が多くてむっと湿度が高く、暑く感じる。

「小野って、どいつだったけ？」

頼子がしれっと聞いてきた。

覚えてないのか、こいつは。あたしは呆れつつ、目線で小野くん的位置を示した。彼は隣の席の子と話している。

頼子は腕を組み、首を傾けてじいっと小野くんを見つめた。ほとんど睨んでいるのと同じだ。頼子はきつめの美人だから、睨まれると迫力があって、正直怖い。やめろとあたしが小突くと、頼子は小野くんから視線を外してこちらを見た。

「……朝子には、地味すぎるんじゃない。」

勝手なことを言う。あたしは顔をしかめた。

「別に、小野くんは地味じゃないよ。派手じゃないだけ。」

やや的外れになったあたしの反論に、頼子は肩をすくめただけだった。

「古典が得意、っていうのもねえ。……根暗そうっていうか。朝子、ああいうの好みだったっけ？」

「根暗でもないよ。」

いいじゃないか、古典が得意でも。暗いなんて間違った偏見だ。小野くんの古典が得意なことは、何らマイナスポイントではない。むしろ長所なんだ。

頼子はあまり納得いかないように首を傾げている。確かに、小野くんは特別かつこいいわけじゃないよ。背が高いとかすぐくお洒落とか、そういうわけでもない。頼子の好みには入らないのかも。でも、地味でも何でも。

「あたしには、眩しく見えるんだから仕方ない。」

ぽつんと言うと、頼子はふと笑った。優しげな微笑みで言う。

「……摩訶不思議。」

意地悪な奴だ。あたしは、今度は結構本気で小突いてやった。

頼子にからかわれるのが癪で、しかもなんとなく恥ずかしくて、あたしは机の上にまだ出してあった便覧をごまかすように開いた。とりあえず、頼子のにやにや笑い以外のものを見たかったのだ。

ぱつと開いたページには、万葉集の歌が載っていた。ますらおぶり、素朴で雄大、とか習ったやつだ。ふと、その中の一首に目が留まる。思わず、しげしげと見つめてしまった。

大地は 取り尽くすとも 世の中の 尽くしえぬものは 恋にし  
ありけり

この歌を詠んだ人も、恋したのかな、と思った。

#### 4（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3468m/>

---

古典の恋

2010年10月8日13時46分発行